

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370480

研究課題名(和文) 『コリャーク語文法』完成に向けた調査研究 - ヴォイス・節構造の諸相を中心に

研究課題名(英文) Research Toward the Completion of A Koryak Grammar; Focusing on the Aspects of Voice and Clause Construction

研究代表者

呉人 恵 (Kurebito, Megumi)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：90223106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、コリャーク語文法を完成させるために現地調査を行い、従来の文法で欠如していた統語論の記述の充実に務めた。その結果、節構造、複統合性、属性叙述、コピュラ文等、動詞統語論の記述を大幅に進展させた。

成果は、国内の学術誌(査読付き)に掲載されただけでなく、The Oxford Handbook of Polysynthesis (Oxford Univ. Press), Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (Mouton de Gruyter) への寄稿を行うなど、国際的著作の出版にも参加した。又、コリャーク語のテキスト3巻を刊行した。

研究成果の概要(英文)： During the period of the present research, I conducted fieldwork toward the completion of A Koryak Grammar and tried to complement the description of syntax which had been absent in the previous version of A Koryak Grammar. The research resulted in significant progress in the description of verbal syntax such as clause construction, property predication, copula sentences, and polysynthesis.

The results of this research were not only published in domestic academic journals, but also internationally in books such as The Oxford Handbook of Polysynthesis (Oxford University Press) and the Handbook of Japanese Contrastive Linguistics (Mouton de Gruyter). Three volumes of Koryak texts were also published during the period of the present research.

研究分野：コリャーク語学

キーワード：コリャーク語 文法記述 統語論 節構造 複統合性 属性叙述 コピュラ文 テキスト分析

1. 研究開始当初の背景

コリヤーク語は、北アジアの言語のみならず北米のインディアン諸言語とも類似性を持つことから、新旧両大陸の「要的」あるいは「橋渡的」言語として注目されてきた。

しかし、このような言語学的重要性にもかかわらず、いまだその姿は十分には明らかにされていない。また、従来のコリヤーク語研究には、次のような問題点があった。

- (1) 公刊されたコリヤーク語の包括的な文法記述は、ロシア語で書かれた Zhukova (1972) 1冊だけである。しかも、Zhukova (1972) は音声・音韻論ならびに形態論の記述に終始しており、統語論の記述が完全に欠落している。
- (2) コリヤーク語の記述に際し、ロシア語学の理論的枠組みが踏襲されており、コリヤーク語独自の特徴に沿った記述がなされていないところがしばしば見受けられる。
- (3) 現時点で、コリヤーク語の専門家は、世界的に見ても Zhukova 以外には私しかおらず、コリヤーク語研究はきわめて手薄な状況に置かれている。
- (4) コリヤーク語は話者数の激減により、急速な消滅の危機に晒されており、その言語学的重要性にもかかわらず、記録に残しうる一次資料が限られてきている。

以上の状況に鑑み、統語論もカバーするコリヤーク語の包括的な文法を書くことが緊急の課題となっていた。

2. 研究の目的

本研究は、シベリア北東部に分布するチュクチ・カムチャツカ語族のひとつ、コリヤーク語の文法の完成に向けて、記述の充実を図ることを目的としておこなわれた。すなわち、文法を完成させるには記述がまだ不十分なヴォイス、節構造など動詞にかかわる統語論的諸現象を中心に調査研究を進め、類型論的知見 (Dixon 2000, Gast & Diessel (eds.) 2012 など) を参考にしつつ分析をおこない、動詞統語論を中心とした記述の充実化を目指した。

3. 研究の方法

既存の資料にもとづく記述ならびに現地調査をベースとして研究を進めた。現地調査については、現在、ロシア連邦マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区のコリヤークの居住地にはアクセスが非常に難しくなっている。したがって、時間の節約と効率のいい調査のために、平成 26-29 年度まで毎年 9 月から 10 月にかけてコンサルタントをロシア連邦ハバロフスク市に招聘し、統語論の諸現象を中心に、集中的に聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

(1) **複統合性**：コリヤーク語は、抱合をはじめとする語幹合成が生産的であり、それにより他の言語では文で表されるような内容が一語で表される、いわゆる統語ならぬ統辞現象が顕著な言語である。呉人 (2015a)、Kurebito (2017) では、コリヤーク語のこの統語ならぬ統辞現象の特質について、複統合性

という観点から考察し、その特質を探った。

呉人 (2015a) では、動詞語幹がどれだけ拡張しうるか、拡張した複合語幹がどのようにして一語文に仕立てられるのかという、派生部分と屈折部分の 2 つの側面からの観察をおこない、主に次の点を明らかにした。

① コリヤーク語の複統合性、とりわけ、動詞の側での複統合性は、抱合と派生接辞の折衷タイプを示す。すなわち、名調の動詞語幹への抱合と、具体的な動詞概念をもち、出名動詞を作る接辞が、時に相補分布的に働きながら、統合度を高める根幹としての機能を担っている。

② 抱合は、自立動詞語幹に名調、副詞、形容詞が複合的に結合することにより作られる。

③ コリヤーク語は、統語法的に二重標示タイプである。アスペクトやムードを示す屈折接辞に加え、S, A, P 項との一致が動詞語幹前後につく屈折接辞によって示される。これにより複統合的な一語文の創出が可能になっている。

Kurebito (2017) では、呉人 (2015a) をさらに深めるとともに、他の複統合的言語との違いにも着目し、コリヤーク語は接辞と抱合が複統合性を高める手段であることから、抱合を多用するイロコイ語族タイプと専ら接辞を用いるエスキモー語の中間的な性格を示すことを指摘した。このような視点からの研究はこれまでなく、国際的な著作に掲載されたのも、その点が評価されたものと考えられる。

(2) **副詞節における名詞化タイプと非名詞化タイプ**：呉人 (2016a) では、節構造のひとつ副詞節の述語動詞の 2 つのタイプ、すなわち、名詞化タイプと非名詞化タイプの特徴を記述した。また、このうち、動詞語幹に名詞のように格接辞を付加する珍しいタイプである非名詞化タイプが周辺の諸言語に見られるか、見られるとしたらコリヤーク語との間にどのような影響関係が想定されるかについて考察した。さらに、このような非名詞化タイプがコリヤーク語では他にどのような用法に見られるのかを探った。その結果、次のような点が明らかになった。

① 名詞化タイプでは、方向格、与格、場所格が名詞化された動詞語幹につき、時間節、目的節の述語動詞を形成する。一方、非名詞化タイプでは、場所格、道具格、与格、共同格、随格が裸の動詞語幹につき、時間節、原因節、条件節、様態節、引用節、導入節などを形成する。このように、コリヤーク語では非名詞化タイプのほうが、用いられる格接辞の種類、表わしうる副詞節の種類において優勢である。

② 周辺の言語の中では、唯一、エスキモー・アリュート語族のコピック語、ナウカン語に同様の非名詞化タイプが副詞節として用いられている例が観察される。エスキモー・アリュート語族の他の言語にはこのような例が見られないこと、話者にインフォーマル

な言い方であると認識されていることなどから、コリヤーク語を含むチュクチ・カムチャツカ語族からの影響が考えられる。

さらに、非名詞化タイプは、副詞節のみならず、不定詞や命令形式にも見られることから、コリヤーク語は名詞的コード化と動詞的コード化のスイッチングが述語文全体にわたって広く見られる特異な類型論的特徴を持っていることを指摘した。この種の研究では、Stassen (2003)が代表的であるが、その中でもこのことは言及されておらず、述語文の類型論的研究に新たな知見を加えたものと評価される。

(3) 形動詞の統語的機能: 呉人 (2017a) では、これまで伝統的なコリヤーク語文法で「形動詞」と呼ばれてきた形式 (動詞 GE 形) を取り上げ、その統語的特性について考察し、次の点を明らかにした。

①動詞 GE 形は連体修飾語、主節述語のいずれとしても用いられ、その意味では形動詞的である。ただし、連体修飾語としての機能は、意味的にも形態的にも制限がある。名詞につく同様の形式にも同様の特徴が見られる。このことから、動詞 GE 形は主節述語としての機能を主とし、連体修飾語としての機能は副次的であることがうかがえる。

②一方、動作者名詞は名詞項、連体修飾語、連体修飾節述語、名詞節述語、主節述語として広く用いられ、より形動詞的な性格を強く持つとともに、動詞 GE 形の機能的な欠落部分を補完している。

さらに、呉人 (2017b) では、動詞 GE 形を同系のイテリメン語において対応すると言われてきた K--KNEN 形と比較し、統語、形態、意味の面からその対応関係に再検討を加えた。その結果、次の点が明らかになった。

③両形は、統語的には共通しており、いずれも「形動詞」的な機能を持つ。ただし、主節述語としての機能が主である点では、周辺の他言語の形動詞とはその性格を異にする。

④両形は、名詞語幹からの派生、属性叙述の可否という面で形態的、意味的に重要な相違があり、この相違は、対応関係が指摘されてきた N 形: K--IN 形とねじれた形で顕現している。

コリヤーク語とイテリメン語はともにチュクチ・カムチャツカ語族に属する。しかし、イテリメン語は他の同系の言語とは様々な点において隔たりが大きく、時に、同系性についても疑義が呈されてきた。本稿で従来、対応関係が指摘されていたものの、その是非について十分考察がなされていなかった両言語の「形動詞」を比較し、その詳細を明らかにしたことで、今後の語族の系統関係を解明するうえで、重要な視点を提供したといえる。

(4) 属性叙述: Kurebito (2018)では、日本語学において事象叙述と属性叙述という2つの叙述のタイプを区別することを提案した「叙述類型論」(益岡 1987)の枠組みを紹介しつ

つ、呉人(2009)で指摘したコリヤーク語の「属性叙述」専用形式について、日本語との比較対照をおこない、次の点を明らかにした。①日本語の属性叙述は、「～は～だ」という有題文によって表される一方、コリヤーク語では、従来、「形容詞」と言われていた属性叙述専用形式によって表される。

②事象叙述文は、項一述語という文法関係、属性叙述文は主題一解説という情報構造という異なる基盤で成り立っている。ただし、その際、属性叙述は事象叙述とは全く異なる独自の統語操作をおこなうのではなく、事象叙述文の構造制約を利用しつつも、そこに一部、違反を起こすことで属性叙述文が創出される。

③このことは、益岡(2008:7)が日本語について述べた「属性叙述と事象叙述は相互に完全に分断されているのではなく、‘通路’が開いている」との指摘にも通じる。

これまで明確な属性叙述専用形式を持つ言語は知られていなかったため、この研究で示したコリヤーク語のデータは叙述類型論の視野を広げうる可能性を持っている。

(5) 人称コピュラとコピュラ動詞: コリヤーク語のコピュラ文を形成する人称コピュラとコピュラ動詞のスイッチングについて、Stassen (2003)の提案した「永続性パラメータ」と照らし合わせながら考察を加えた。その結果、以下のことが明らかになった。

①人称コピュラは無標であり、基本的にどのような述語名詞とも共起できる。構造上、時間の文法カテゴリーが標示されないことから、時間的な制約のない固定した対象として述語名詞をとらえ描写する際に用いられる。ただし、一時的な役割や機能を表わす述語名詞の場合には、発話時点を含意する時間副詞に限って共起が可能である。

②コピュラ動詞は、テンス・アスペクトといった時間カテゴリーや、発話時点かその前後にかかわらない時間副詞とも共起可能で、時間の流れの中で対象を動的にとらえる際に使われるといえる。基本的には一時的な役割や機能を表わす述語名詞と共起しやすいことから、このことはうかがえる。ただし、固有成り不変的な事物を表わす名詞であっても、対比的な文脈が与えられれば、コピュラ動詞の補語になりうる。

以上から、コリヤーク語では Stassen (2003)の言う Event, Property, Class, Locational のすべての意味クラスにわたって、品詞のスイッチングが起きていることが明らかになり、述語類型論にさらに新しい知見を加えた。

【参考文献】(自身の論文は除く)

益岡隆志 (1987)『命題の文法』東京:くろしお出版。

益岡隆志 (2008)「叙述類型論に向けて」益岡隆志(編)『叙述類型論』3-18. 東京:くろしお出版。

Dixon, R.M.W. and Aikhenvald A.Y. (2000)

Changing Valency: Case Study in Transitivity.
Cambridge: Cambridge University Press.
Gast, V. and Diessel, H. (2012) *Clause Linkage in Cross-Linguistic Perspective: Data Driven Approaches to Cross-Clausal Syntax.* Mouton De Gruyter.
Stassen, Leon (2003) *Intransitive Predication.* Oxford: Oxford University Press.
Zhukova, Alevtina Nikodimovna. (1972) *Grammatika korjaskogo jazyka.* Leningrad: Izdatel'stvo Nauka.

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

呉人恵 (2015a) 「コリヤーク語の複統合性—抱合と接辞の折衷タイプ—」『北方言語研究』5: 55-82.

呉人恵 (2015b) 「環北太平洋諸言語の語彙的接辞」『国立民族学博物館調査報告 132:145-162.

呉人恵・栄夏代・中条充子 (2016) 『『コリアキ土人調査書』解題と翻刻』『北方人文研究』9:137-163.

呉人恵 (2016a) 「コリヤーク語の副詞節—名詞化タイプと非名詞化タイプ—」『北方言語研究』6: 1-23.

呉人恵 (2016b) 「日本における北方諸言語研究の過去・現在・未来」『第 30 回北方民族文化シンポジウム報告』31-38. 北方文化振興協会.

呉人恵 (2017a) 「コリヤーク語の「形動詞」の機能: 「動作者名詞」との比較を通して」10:145-164.

呉人恵 (2017b) 「コリヤーク語の動詞 GE 形とイテリメン語の K--KNEN 形: 形動詞性をめぐる比較」『北方言語研究』7:1-22.

呉人恵 (2018) 「コリヤーク語における人称コンピュータとコンピュータ動詞のスイッチング」『北方言語研究』8:1-21.

Kurebito, Megumi (2017) *Koryak*. In: Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans (eds.) *The Oxford Handbook of Polysynthesis*, 832-850. Oxford University Press.

Kurebito, Megumi (2018) Property predication in *Koryak* viewed from Japanese. In: Pardeshi, Prashant and Kageyama, Taro (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, 677-696. Berlin/New York/Amsterdam: Mouton De Gruyter.

[学会発表] (計 5 件)

Kurebito, Megumi (2014) Choice factors in the case marking for underlying object in the *Koryak* S=A alternation, *Syntax of the World's Languages VI*・2014.9.9・University of Pavia, Italy

呉人恵 (2015) 「北方諸言語研究の過去・現在・未来」第 30 回北方民族文化シンポジウム・2015.10.25・一般財団法人北方文化振興協会, 北海道立北方民族博物館主催・網走エコーセンター

呉人恵 (2016) 「コリヤーク語版『星の王子様』—「生きた」言語としての証—」(東京外国語大学外大祭講演会 2016.11.20) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

呉人恵 (2017a) 「コリヤーク語の名詞修飾節—分詞と定形動詞による相補的形成」(「対照言語学」プロジェクト第 1 回合同研究発表会 (国立国語研究所, 2017.2.19))

呉人恵 (2017b) 「新旧両大陸の要的言語, コリヤーク語—その移動と相互影響の痕跡をたどる—」人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「北東アジア地域研究」国立民族学博物館拠点・北東アジア地域研究会 (国立国語研究所 2017.10.26)

[図書] (計 4 件)

呉人徳司・呉人恵 (共著) (2014) 『探検言語学—ことばの森に分け入る』札幌: 北海道大学出版会.

Kurebito, Megumi (ed.) (2016) *Koryak Text 2.* Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.

Kurebito, Megumi (ed.) (2017) *Koryak Text 3.* Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.

Kurebito, Megumi (ed.) (2018) *Koryak Text 4.* Toyama: Faculty of Humanities, University of Toyama.

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

呉人 恵 (KUREBITO, Megumi)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：90223106

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()